

多様な人財を活用した地域社会の構築にむけた
多文化コンシェルジュ育成事業における地域的効果と課題について

平成 27 年 3 月

一般社団法人グローバル人財サポート浜松

内容

目的	2
内容	2
プログラムの流れ	4
コースデザイン	5
テキスト（例）	6
【第1回】	7
【第2回】	9
【第4回】	11
【第6回】	12
【第7回】	14
【第10回】	19
ヒアリング調査とニーズ分析.....	23
事業成果と地域的効果.....	24
課題	25
事業評価と社会的インパクト.....	26
多文化コンシェルジュと社会教育・生涯学習の推進.....	28
人材教育としての日本語教育.....	30
多文化コンシェルジュに必要な日本語でのプレゼンテーション能力育成について....	31
「自立と自律」を支える人材育成.....	34
参考資料	36
第1回運営委員会資料.....	37
第2回運営委員会資料.....	43
第3回運営委員会資料.....	47
協議会資料	56
公募チラシ	62

目的

浜松市をはじめとする地域社会における、これからの多文化共生社会の構築には、高い日本語能力を有する外国人が率先して自らの文化や民族性を日本人に伝え、相互理解を深める場が必要である。そこで外国人の多文化パワーを地域に活かすべく、高い日本語コミュニケーション能力をもつ外国人多文化コンシェルジュを育成し、地域の多文化共生社会づくりに寄与する人財としていく。

内容

多文化コンシェルジュに必要な基本的な内容を学ぶベーシックコースと、より技術を高めるスキルアップコースの2コースで開催した。

○ベーシックコース

全12回

技術・学び	テーマ
発表	自国の文化紹介をしてみよう①
発表	日本の文化紹介をしてみよう②
PR力・広報力	広報・お知らせの書き方、見せ方
朗読	読み聞かせをしてみよう
マナー	おもてなしマナー
作文	お手紙を書こう
異文化理解	日本人とうまく働く秘訣
PR力・発話力	自己PR、魅せるポイント
文書作成	行政文書の書き方
企画力	異文化講座を企画しよう
構成力	実際にやってみよう①
発表	実際にやってみよう②

昨年度は、地域の状況把握からニーズ分析、外国人から見た課題などを取り入れていたが、今年度は日本人を対象にしたプロジェクト等で多文化コンシェルジュとしての役割を果たすことのできる内容になった。本コースでは、日本語の習得だけでなく、多文化間相互理解のための戦略的技術の習得として、マナーを学ぶ「おもてなしマナー」をはじめ、「自己PR」では自分の良さをどのように



伝えるか、「手紙を書こう」では仕事を与えてくれた人に対して人間関係に配慮した方法で感謝の気持ちを述べるができるようにした。コースの前半では自己紹介も兼ねて母国の文化紹介を行い、後半では、自身が考えたプレゼンテーションの構成について学ぶようになっている。このようにして、多文化コンシェルジュに求められる能力を受講しながら理解していき、最終的な目標値を意識しながら受講しやすい内容にした。



○スキルアップコース
全4回

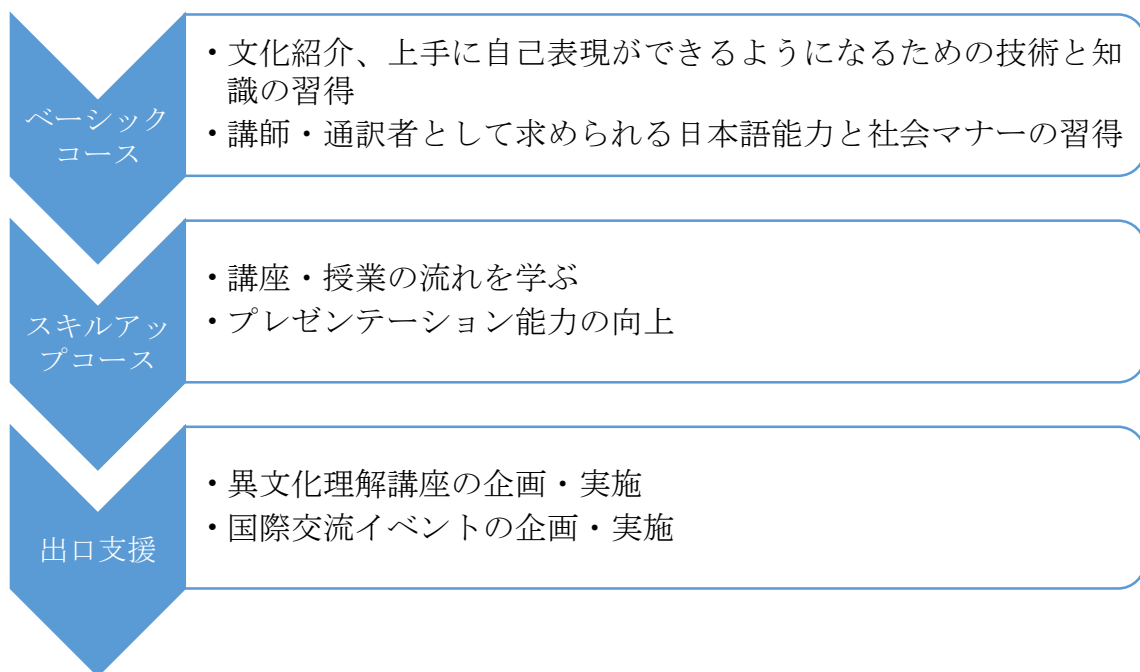
スキル・学び	テーマ
構成力	教案づくり
プレゼンテーション力・ 内容・ニーズ分析	実践から学ぶ講座運営の秘訣
プレゼンテーション力	プレゼンテーション1
プレゼンテーション力・ 企画力	プレゼンテーション2

スキルアップコースでは、本コースの目標を実際の文化講座かシンポジウムでのプレゼンテーションと決め、その内容を企画するところからスタートしていった。そのため、プレゼンテーションを何度も練習する時間数を増やし、その内容の改善と技術の向上を進めていった。



プログラムの流れ

講座や事業を設定する際に、受講者や参加者にとって目標（ゴール）となるものが見えづらいと、継続的な受講がなくなり、脱落してしまうケースがある。目標が見えたほうが自身の学習ニーズと合っているかどうかを受講前に見極めることができるので、主催者側も受講者側にもメリットが大きい。また、主催者にとっては、多文化コンシェルジュになりたい人＝受講者ということがはっきり見えるため、その後の出口支援を講座開催中から準備することが可能となる。しかしながら、途中離脱してしまう受講者もいる。これについては、自分に向き不向きがあることに気づいたケースと内容の難易度が高すぎたという理由があった。結果的には、受講者間での課題の共有が、国籍を超えた友情と結束力につながり、かつシンポジウムでの発表の成果につながっていったことから、仲間の存在は学びに大きな影響を与えることがわかった。



コースデザイン

多文化コンシェルジュに求められる能力には、

- ① ニーズ把握・分析力
- ② 情報収集力
- ③ 交渉力
- ④ プレゼンテーション能力

があげられる。そこで、ベーシックコースでは、情報を集め（第1回・2回）、発表する（第11回・12回）練習の時間を設けた。そして、多文化コンシェルジュが日本人を対象にしたときに印象を良くするための手法として、礼儀作法（第6回）、手紙で季節のあいさつをする（第7回）、宣伝用写真の写り方や歩き方（第8回）についても学ぶようにした。また、日本人の労働観について学んだ（第9回）。これらは、彼らが今後、講師や通訳として活躍するうえで、知っておくと便利な内容を盛り込むことで、実際に講座を担当するときの戦略的な技術の習得を目指したものとなっている。このコースの特徴は、日本語教師ではなく、その道のプロ、いわば専門家・当事者が講師となっている回があるということである。

一方、スキルアップ講座では、講座構成力とプレゼンテーション力の向上に特化して、模擬発表のテーマを他己評価とし、相互研さんを図っていった。

いずれのコースでも、多文化コンシェルジュが文化通訳者であるということを受講者が理解し、その活動に積極的に参画できるようにプログラムが構成されている。常に出口（＝受講後、何をしていくのか、どういう人財になるのか）を見せさせていくことこそが、人材育成としての教育プログラムに必要なことだと考えている。

テキスト（例）

ベーシックコースで使用した教材（例）は以下のとおりである。テキストを見るとわかるように、まずは自分で考えて、仲間と共有し、それを発表（アウトプット）させるという流れで1回の授業が構成されている。

そのため、話すことはできても書くことができないという受講者には、時に難しい授業であった。思っていることを書き出すことによって、文法の見直しをすることができ、発話内容の組み立て方についても指導することが可能となった。受講者は、長音や特殊音の書き方があいまいだったり、母語の影響を受けたりしていた。頭で考えたものをどう日本語で伝えるか、まずは自分自身の書き出した日本語を見て、誤用や書き間違いに気づいたり、講師から指導を受けたりして、日本語を学んでいった。

スキルアップコースでは、それに加えて、聞く相手によって変わることを、たとえば中学生向けの表現かどうか話してもいい内容かどうか、外国人の自分だからこそ敢えて話したほうがいい内容であるか、または語彙はどう使ったらよいのか、その発表内容の是非について、講師から具体的な指導を受けていた。このことは、自分自身の半生を振り返ることにつながり、外国人だからこそわかる日本の社会の長所・短所に触れる機会となり、受講者間での意見も活発に交わされた。こうして、多文化コンシェルジュとして自身が求められている役割が何かをより一層強く感じられるようになっていった。

以下に各回に使用した教材を例示する。

【第1回】

テーマ 「 自分の国の文化を紹介しよう 」

あなたの国の文化について、日本人に紹介してください。

1) 文化のリストをあげましょう

きこう ちり
気候 地理

げんご こうようご ほうげん
言語 公用語 方言

じんこう みるぞく
人口 民族

じゅうかんきょう
住環境

食べ物 飲み物

ファッション スポーツ

2) リストのなかから、テーマを1つにしぼりましょう

テーマ「
ポイントは・・・日本にあっても日本とは違うこと、日本にないことを伝えること

3) 10 分で紹介できるように、発表のスクリプト(台本)を考えましょう

【言葉】 さて、それから、一方、ところで など→話を転換させる
そのうえ、そして、また など→内容を加える
ちょっと見てみてください、日本にありますか？ など→相手に意識させる

4) 10 分で紹介してみましょう

【第2回】

テーマ 「 日本やあなたの街を紹介しよう 」

日本の文化について、あなたの国の人たちに紹介してください。

1) 日本

●人口 1 億 2600 万人

●文化 wikipedia より

4 世紀～9 世紀、[渡来人](#)により、大陸の文化が伝わった。日本も[遣隋使](#)・[遣唐使](#)や留学生を派遣し、積極的に中国の文化を取り入れた。朝鮮半島や[渤海](#)との交流も続いていた。

大陸との往来が減った 10 世紀頃から、これらの輸入された東アジア文化が在来の文化と融合し、日本に特有の[国風文化](#)へと発展する。平安時代の文化は貴族や寺院によって担われていたものが現代にまで伝わり、王朝文化の中から生まれた[和歌](#)や[王朝物語](#)は後世の文芸の規範として大きな影響を残した。平安時代末期には[仏教](#)信仰の深まりを背景に「[幽玄](#)」などの中世的な美意識が生まれた。

12 世紀頃、[北宋](#)との貿易によって紹介された禅宗が[禅](#)に発展し、喫茶の習慣も禅宗の寺院から上層階級に定着する。

16 世紀の半ばからポルトガル人や[スペイン](#)人などヨーロッパの人々が来航し、キリスト教や鉄砲が伝えられた。

→これは、難しい！！

●日本が世界に誇るものを考えよう！

例) アニメ、マンガ、ゲーム、初音ミク、トヨタ、AKB48 (アイドル)、JK …

2) 日本って、どんな国ですか？

「いいな♪」って思うことを、リストアップしてみよう

3) 10 分で紹介できるように、発表のスクリプト(台本)を考えましょう。

4) 発表しましょう。

【第4回】

としょかん よ き まな あんない
図書館で読み聞かせを学ぼう～」についてのご案内

にち じ
日 時 7月25日(金) 10:00～12:00

が つ にち ど
7月26日(土) 13:30～15:30

かい じょう
会 場 はまつしりつちゅうおうとしょかん かい
浜松市立中央図書館 1階 「おはなしのへや」

ちゅうおうとしょかん ちゅうしゃじょう こんざつ りょう こと
*中央図書館の駐車場は、混雑のために利用できない事があります。

でんしゃ ちか につかんはまつじょう ちゅうしゃ ねが
バスや電車を使うか、近くの「日管浜松城パーク」に駐車をお願いします。
ます。

ちゅうしゃじょう ばしよ しりょう み
(駐車場の場所は、資料①を見てください。)

ない よう
内 容 ●としょかん おこな よ き たいけん よ き き
●図書館で行っている読み聞かせを体験(読み聞かせを聞く)

よ き せつめい よ き たいせつ
●読み聞かせについての説明(読み聞かせの大切さについて、

よ き おこな とき ちゅうい こと
読み聞かせを行う時に注意する事etc)

よ き じっせん としょかん ようい えほん すほん さつえら
●読み聞かせの実践(図書館で用意した絵本から、好きな本を1冊選び、

ほんばん どうよう よ き おこな
本番と同様に読み聞かせを行う)

くわ ないよう じかんわり しりょう
* 詳しい内容と時間割は、資料②を見てください。

た れんらく こうざとうじつ うんてんめんきょしょう ほけんしょう ざいりゅう なまえ いま じゅうしょ
その他連絡 講座当日、運転免許証や保険証、在留カードなど(名前、今の住所、

せいねんがっぴ しょうめいしょ も としょかん
生年月日がわかる証明書)を持ってきたいただければ、図書館の

りようしゃ つく
「利用者カード」を作ることができます。

つく ひ としょかん ほん か
カードを作った日から、図書館の本を借りることができます。

【第6回】

テーマ 「 あなたの考え、思いを書きましょう 」

最近あった出来事を書いてください。

1) 5W1H

- いつ
- どこで
- だれが(だれと)
- 何を／何のために しましたか？
- それは、どのようなこと／どのようなもの でしたか

- それについて、あなたはどのように思いましたか



まとめて、書いてみましょう！

2) 叙述(見たもの)の練習をしよう

3)発表しましょう

みんなが発表したことに、コメントをしましょう

4)暑中見舞いしゅちゅうみまを書いてください(宿題)。

⇒ 〒430-0933 浜松市中区鍛冶町 1-64 育栄ビル3F
グローバル人財サポート浜松 堀

【第7回】

「^{たぶんかこんしえるじゅ}多文化コンシエルジュのための^{にほんごこうぎ}日本語講座」

にち じ ねん がいつ か きん
日 時:2014年9月 5 日(金) 10:00～12:00

ば しょ ざい はままつ けんしゅうしつ
場 所:グローバル人財サポート浜松 研修室

て ー ま にほんじん はたらひけつ にほんじん かちかん
テーマ:「日本人と働く秘訣～日本人の価値観」について

ない よう ちゅうごくしゅつしんしゃ わたしじしん しつぱい きづき とおして がいこくじん にほんしゃかい
内 容:中国出身者である私自身の失敗や気づきを通して、外国人が日本社会で

はたらく ひつよう ち え かんがえる
働くために必要な知恵について考える。



【^{じ こしょうかい}自己紹介】

ちゅうごくりょうねいしょうしゅつしん
中国遼寧省出身。

ねん がつ し ひりゅうがくせい らいにち
2001年4月、私費留学生として来日。

ねん がつ わ か や まだいがくそつぎょう
2006年3月和歌山大学卒業。

ねん がつ ざいだんほうじんわ か や ま けん こくさいこうりゅうきょうかい ねんかん きん む
2006年4月～ 財団法人和歌山県国際交流協会にて3年間勤務

ねん がつ ぜんこくしちょうそんこくさいぶん かけんしゅうしょ ねんかん きん む
2009年4月～ 全国市町村国際文化研修所にて3年間勤務

ねん がつ げんしよく とくていひ え いりかつどうほうじん たぶん かきょうせい ま ね ー じ ゃ ー
2012年4月～ 現職 特定非営利活動法人多文化共生マネージャー
ぜんこくきょうぎかい じ む きょくちょうしゅうにん
全国協議会事務局長就任

【^{おしえて}あなたのことについて教えてください。】

①^{なまえ}名前 (ニックネーム)

②^{しゅつしんこく}出身国

③^{にほん き てなんねんめ}日本に来て何年目ですか。

④^{しよくぎょう}職業もしくはやってみたい仕事^{しごと}

つぎ わだい とおして みなさん いけんこうかん にほんしゃかい はたらく ひつよう
【次の話題を通して、皆さんと意見交換をしながら、「日本社会で働く」うえで必要なこと
について一緒に考えていただきたい。】

1. 働く前はたらくまえのことについて

①職員採用試験しよくいんさいようしけんで考えさせられることかんがえさせられる

てーま
テーマ1

にほん にほん こねしゃかい
日本は/日本も(?)コネ社会?

め も
メモ

しよくいん さいよう しごと える
職員として採用してもらうために/仕事を得るために

- ・公募こうぼに向けての準備じゆんび（情報収 集じようほうしゅうしゅう、試験しけんに向けての勉強べんきょう、ネットワークなど）
- ・試験当日しけんとうじつ（筆記試験ひっきしけんより面接めんせつが大事だいじ？）

②働く前はたらくまえの準備じゆんびはいろいろ

てーま
テーマ2

しごと き み た め かたち じゅうよう
仕事のやる気きよりも見た目かたちや形じゅうようが重要?

め も
メモ

- ・身のまわりのこと（髪型かみがた、爪つめ、服装ふくそう、香水こうすい、手帳てちょう、腕時計うでどけいなど）

- ・オフィスで働くための基本きほん（電話対応でんわたいおう、人名じんめい、地名ちめい、組織名そしきめいの事前学習じぜんがくしゅうなど）

2. 日本の職場、日本人の働き方は謎だらけ？

①日本の職場で働き、最初の頃、不思議に思ったこと

テーマ3

日本の職場のルール、習慣は変わっている？

たとえば ①「組織」への帰属感が強く、「組織」を大切にする？ うち・そとの概念って何？

就「職」よりも就「社」という言い方のほうがわかりやすい？ 連帯責任ってあり？

②「いつもお世話になっています。」って本当にそうなの？ それって大事な言葉なの？

③実力主義ではなく、年功序列？

働かなくても大事にされている役員、上司、社員たちがいる？

④ほうれんそうって何のこと？

⑤決済は形だけ？ 決済前の根回しが決め手？

⑥日本人は書類が好き？ 書類は本当に大事？

⑦日本人は時間通りに動かないと不安になる？

⑧アポイントなしの訪問は失礼？ それともサプライズ？

⑨その他

②外国人職員の戸惑い、自分の意見はどこまで出すか。

てーま
テーマ4

「石の上にも3年」、自分の意見を言わないほうがうまくいく？

仕事は日本人に教えてもらうもの？ それとも自分流が大事？

め も
メモ

- ・会議の進め方（事前調整、更には飲コミュニケーション）
- ・意見の出し方、外国人ならではの気がつくこと、外国人の自分だからできることなど、自分の強みと弱みとの付き合い方

③働くことに対する考え方は国や人によって違う。

てーま
テーマ5

日本人は働き過ぎ？ 人生と仕事が本末転倒？

め も
メモ

- ・働くことに対する価値観の違い（国や社会の状況、人々のライフスタイルなど）

さいご はたらく こと を こえて・・・ たいせつ な こと を はなし あお う
にほん せいかつ い み ぼこく かぞく つきあいかた にほんしゃかい つたえたいおもい めっせーじ
日本で生活する意味や母国にいる家族との付き合い方、日本社会に伝えたい思いとメッセージ
は？

【第10回】

テーマ 「 講座を企画しよう 」

日本人があなたの文化を学ぶ・体験する・知る講座を企画してみてください。

1) タイトルを決めましょう

● だれのための・・・対象；日本人の大人

● それは、どのようなこと／どのようなもの を学べますか・体験できますか

ポイントは、「行ってみたいな」「面白そうだな」と思わせること！

タイトルは大事！！

2) 構成を考える

今回は 12 分間でできるものを考えてみてください。

どうにゅう しょうかい かつどう かいわれんしゅう はってん
導 入、紹 介、活 動、会 話 練 習、ド リ ル 練 習、発 展、は じ め に、お わ り に、

ま と め、お さ ら い、ワ ー ク シ ョ ッ プ、グ ル ー プ ワ ー ク、コ ー ラ ス、起 承 転 結、

ふ ふ かえ よしゅう ふくしゅう かだい きょうゆう いけんこうかん しつもん しつぎおうとう
～に 触 れ る、振 り 返 り、予 習、復 習、課 題、共 有、意 見 交 換、質 問、質 疑 応 答

<構成>

時間・項目	教授内容	ポイント・教材
導入		
練習・内容		
発展		
まとめ		

3)教材を考える

もぞうし かいぞうし かいぞうし かいぞうし かいぞうし かいぞうし かいぞうし
模造紙、パワーポイント、映像、写真、画像、イラスト、音声、聴覚教材、

しかくきょうざい
視覚教材、CD ラジカセ、プロジェクター、スクリーン、ホワイトボード、

すいせい
マーカー、水性マーカー、マグネット、イレーサー、黒板、黒板消し、資料、

はいふしりょう しだい きょうざい げんぶつ どうじつはいふ じゅんじ
配布資料、次第、レジュメ、ハンドアウト、レアリア教材（現物）、当日配布、順次

はいふ ようし
配布、A4用紙、

4)教案・枠組み清書

5) 台本作り(構成にあわせて、自分の発話(TS)を事前書き加えましょう)

時間・項目	教授内容・TS	ポイント・教材
導入		
練習・内容		
発展		
まとめ		

ヒアリング調査とニーズ分析

本事業では、多文化コンシェルジュを育成するスキームの確立を目標としていた。そこで、外国人が、自宅や学校、地域のボランティア教室などで日本語を学んできた過程を振り返り、自身のライフステージのなかで、どの時点でどのような日本語が必要になったのか、それがどのように学習のきっかけとして機能したのかを把握する必要があった。そのため、多文化コンシェルジュを対象に、ヒアリング調査を行った。

その結果、進学、子育て（通院、幼稚園のお便り）、資格取得といった場面で、日本語がわからないという事実が自身に不利となることがわかったときに、日本語への学習意欲がわいたことがわかった。また、結婚生活を営むなかで配偶者や義父母とのやり取りで日本語の必要性が高い場合は、勉強をしなければならないという義務感を持ったことがきっかけとしてあげられた。英語を母国語とする日本人配偶者の場合は、日本語がわからなくても日本人が何らかのサポートをするから、勉強しなくてもいいと思っていたが、社会参画を考えたときに日本語がわかったほうが良いという理由で、日本語を学ぶ決心をしたということや、就職のために日本語を学ぶというよりも、就労後、より高い地位やより良い待遇を求めて日本語を学ぶということからは、自身の意志の主張や権利を守ることが学習の動機としてあげられた。東日本大震災以降は災害時の安全確保のために災害時の日本語に対する関心度が高まっている。このことから、在住外国人にとって、日本語能力は、安心安全な生活の確保と権利の保持として必要な能力であることが明確となった。

そして、彼らは、一定の能力を有したと自信がつき、自分の次のステージを検討する。その際、自分自身の文化背景を有効に活用することを決め、「多文化コンシェルジュ」的な役割を求めるようになるようだ。たとえ、それが多文化コンシェルジュではなくとも、職場や学校、行政窓口での通訳や文化講座の講師などを務めてみたいという意欲が生まれていくことがわかった。

事業成果と地域的効果

高度な日本語能力を有する外国人が「多文化コンシェルジュ」として地域貢献できる人材になるまでのプロセスは確立できた。また、事業自体を多様な機関と協働して行った結果、企業、市内の協働センターや学校、NPOなどの市民団体との連携も生まれ、多文化コンシェルジュの活躍する場を提供することができるよう、出口支援の体制も構築できたことから、今後の活躍が期待できる。

講座から派生して生まれた文化紹介講座では、楽器職人やボーイスカウトなどと開催することができた。その感想によると、「自分の身近なところに素晴らしい外国人の方がいるというのがわかってよかった」「初めてのことばかりで本当に楽しかった」と気軽に参加することができ、楽しく参加できていた様子がかえる。また、これまで、こうした国際的なイベントにおいては、その国のことが好きな人が主に参加をしていたが、今回は初めて海外文化に触れた方もいて、在住外国人からその国の文化を教えてもらう機会の提供ができたようだ。このように、様々な人や機関が多文化コンシェルジュと協働することにより、地域でより魅力的な事業やプロジェクトが生まれ、市民に対して広く多文化共生について理解を深められたりという効果があった。

一連の事業を通して、まさに地域日本語教育を、地域を構成しているあらゆる機関や人とで、協働の域を超えた「総働」で行った。そして、多文化パワーを地域に活かすことにより、新たなつながりと関係性が生まれ、地域に活気をもたらす一助になれたのではないかな。

この事業のプロセスは、他地域でも汎用できるプログラムになっている。

課題

本事業では、高い日本語能力を有する外国人が、情報の羅針盤的存在となるべき多文化コンシェルジュとして、日本社会において活躍することを目的としている。そのため、日本人には自国文化や外国人からみた地域の魅力を伝え、一方同国出身者には日本で生活するうえで必要な情報の提供や助言を行う者と位置付けている。

多文化コンシェルジュには、文化通訳者としての役割が求められている。しかしながら、今回の事業では、多文化コンシェルジュの活動が日本人を対象とする傾向が強くなり、外国人の同国出身者を対象にしたプログラムを設定することができなかった。

一方今回は、多文化コンシェルジュの人材育成スキームの確立を目標としていた。そこで、多文化コンシェルジュの人生ロードマップから、ライフステージ上のどの時点で、どのような学習動機が生まれたのか、どんな学習をしたのかを把握するためにヒアリング調査を行った。その結果、多文化コンシェルジュ一人一人の人生について深く知ることができたものの、生活状況を公にすることは難しいため、それぞれの動機から共通項を探すことにとどまった。ポートフォリオによると、多文化コンシェルジュは未だ日本語能力不足を感じているところがあるように、本事業では、彼らが自立して社会参画していくために必要な日本語能力が何かを明確にするまでには至らなかった。

今回の事業では、日本人向けに文化紹介をする多文化コンシェルジュの育成プログラムの提示をすることができた。これにより、生活者としての外国人から、生活者であり文化伝道師・異文化通訳者として社会参画していく人に求められるチカラのつけ方について、提案することはできた。しかしながら、今後、本事業に汎用性を持たせるためには、同国出身者やコミュニティに対して、異文化通訳者・リーダーとして活躍しつつ、コミュニティを日本社会とつなげていく人材になるための日本語能力の習得について、そのノウハウの確立が課題となっている。これらが全て両輪で動かせるようになってはじめて、多文化共生社会に資する人材育成スキームが構築されるのだと考える。

事業評価と社会的インパクト

日本政府は、留学生30万人計画をはじめ、海外からの高度人材の受入れを推進している。さらに近年の人材不足を見込んで、技能実習制度では、受け入れ業種に建設や介護、さらにはコンビニ業界までに広がりを見せ、能力によっては3年から5年の滞在延長がされるなどしている。一方で、移民政策は取らないとしており、既にデカセギから長期滞在している在住外国人が日本人同様の生活をしているにも関わらず、彼らのスキルアップや社会的地位の向上には特段の措置がなされていない。

南米系外国人が集住している浜松だからこそ、在住外国人が有するパワーを地域に活かそうということを目標に、本事業はスタートした。そのため、高い日本語能力を有する在住外国人を対象に、多文化コンシェルジュの育成を行い、彼らが地域社会に貢献する人材として活躍できる道筋を創出することを目標とした。

現在、ブラジル、ペルー、中国、インドネシア、フィリピン、モンゴル、ポーランド、イギリス、日本の計9か国の多文化コンシェルジュが誕生した。昨年度の受講者がまだ社会的な活動に参画しきれていない者であった一方で、今年の受講者は、既に同国出身者子弟の教育支援を行っている者、教会でのボランティア活動をしている者、行政機関での通訳をしている者といったように、何らかの社会的組織で活動をしている者がほとんどであった。そのため、受講希望の時点で高い意識と意欲が感じられた。今回はこのグループ活動に日本人大学生の参加があったのだが、多文化コンシェルジュ予備軍の外国人受講者にとって、いまだ自身の能力に不十分さを感じているという点で、お互いの知識や技術に対する課題を共有しやすいようで、相互研さんする相手としても大学生の参加は効果的であった。

こうした結果、中部協働センターだけでなく曳馬協働センターの事業へ、東部中学校からKTC中央高等学院からの講師依頼が入ったりと、多文化コンシェルジュの活躍は広がりを見せた。ホームページ上の多文化コンシェルジュ名鑑をご覧になられた方からの通訳の問合せや翻訳依頼もあった。彼ら特有の文化背景が、日本社会における生涯学習や社会教育に功を奏したばかりでなく、経済活動にも活かされていったのである。ここで述べておきたいのは、学校教育の現場での講義では、文化紹介だけにとどまらず、彼らの人生経験が学生たちに強く影響したことである。これについては、講義後アンケートに「日本語がわからず、大変な思いをしたにも関わらず、高校に行こうと努力した姿勢に感動しました。自分は途中で辞めてしまったのでとても恥ずかしいと思ったが、あきらめず頑張ること、失敗を恐れないでいいというお話に、私も頑張ってみようと思いました

た。」(原文のまま)、「これからは、日本語でも自分の意見をしっかりと言えるように、自分の地域をもっと誇りに思うようにしなければならなかったと思いました。」

(原文のまま)といった意見が書かれていることからわかる。多文化コンシェルジュが、学生たちと年齢が近いということもあり、お互いの状況をイメージしやすく、話の内容を理解しやすかったのだと思われるが、彼らの経験が次世代の若者に好影響を与えることが明らかとなった。このことは、まさに多文化コンシェルジュが、多文化共生社会に資する人材であることを証しているのではないだろうか。多文化コンシェルジュの存在自体が社会的インパクトを与えている。

以下は、協働相手である事業主催者、日本語教師、日本語教育の専門家、社会教育の専門家による、それぞれの視点からの本事業の評価である。



多文化コンシェルジュ名鑑

<http://globaljinzai.or.jp/concierge>

多文化コンシェルジュと社会教育・生涯学習の推進

松下直樹（浜松市中部協働センター所長）

製造業が盛んな浜松市において、外国籍市民は貴重な労働力として社会に認識されてきましたが、リーマンショックを皮切りに派遣型の雇用基盤が崩れ、それとともに外国籍住民の労働や居住に対する意識も変化しています。

社会状況の変化を受け、労働力として必要とされた分野も、産業から医療や農業等へと広がり、当然、必要とされるスキルも日本語能力だけにとどまらず多岐にわたるものとなってきている中で、同じ生活者として正しく認識され、社会に必要とされ続けるためには、何をどうすればよいのか…、その道筋の一助としてのモデルケースとなること目指して、足掛け2年にわたり事業を実施してきました。

永住権を有する外国籍住民が増えてきていることは、同時に社会全体がグローバル化することも意味するわけですが、残念なことに、現状としては「互いに刺激しないように生活をしている」だけであって、ニーズや抱えている課題までを共有するには至っていません。

そのような中で始めた事業でありましたが、多文化コンセルジュ達は、自国の文化を紹介することで異文化理解を促進することは勿論、日本人に分かるようにプレゼンテーションする手法などを学び、実際に講座の講師となって発表することを経験するなど、地域社会を構成する生活者として必要なノウハウを学び、日本人受講生は、自分達の隣人がどんな価値観を持ち、何を必要として生活を送っているかを知ることになりました。

よりローカルな社会にアプローチが可能な協働センターを拠点とすることで、地域住民に対する社会教育・生涯学習の向上につなげていくことが可能であり、事例を重ねることで、真の意味での地域リソースとしての人材になると考えています。

平成26年度の大きな実績の一つとして「ショパンの調べ」と題したコンサート事業が挙げられます。これは、予定されていた講座事業からスピンオフして実施した企画ですが、多文化コンセルジュと浜松を代表する調律師がコラボしたことで、音楽文化の発展にも波及するようなダイナミックな展開となりました。ユネスコ創造都市ネットワーク（音楽文化）への加盟が決まり、来年度には、国際ピアノコンクールを控える浜松市の音楽文化に新たなワンピースを提案したのではないかと思います。

多文化コンセルジュは、言語習得や社会生活者としてのモデルとして、検証や活躍のフィールドは多岐にわたるはずであり、自信のポテンシャルを最大限

に発揮することで地域リソースとなり、互いに質を高めあうことができるような隣人として、社会教育や生涯学習の推進を担い手となることを期待しています。

また、そのためには、中部協働センターは、一般社団法人グローバル人財サポート浜松と協働し、多文化コンセルジュと地域社会をつなぐ橋渡し役としてあり続けることで、行政機関・地域社会の情報拠点としての役割を果たしていきたいと考えています。

人材教育としての日本語教育

鈴木 淑恵（一般社団法人グローバル人財サポート浜松）

「多文化コンシェルジュのための日本語講座」を昨年度に続いて日本語教師として担当しました。今年度もまた、日本語能力も学習意欲も高い受講者の皆さんが集いました。母国で高度教育を受けた方、来日後に独学で日本語習得した方、既に日本で同胞支援に携わっている方など、立場や環境も違うメンバーが集う講座でした。当然それぞれの具体的な目標、それを実現するために必要とする日本語能力も異なりますが、「日本（地域）で自己表現したい、活躍したい」という思いを共有していたように感じます。

外国人が地域で社会参加するのに必要とされる要素を、外国人の側からも日本人の側からも取り入れてコースデザインしているのが特徴だと思います。

講座内容には、これって日本語教育なのか？と思われるであろう項目もあります。どれも昨年度の反省から必要だと気付いた内容です。おもてなしマナーや立ち居振る舞いなど、受講生からの「学びたい、知りたい、誰に教えてもらえばいいか分からない」という声に答える形で実現しました。そして、それらをすべて日本語教師でまかなえるかと聞かれたら、無理な話だと思います。

日本語学習初期の学習でも、語彙や会話例文などを通して日本文化や習慣に触れることはできます。けれども、コンシェルジュ講座の受講生たちの求めるレベルは表面的なものではなく、日本人が身につけているものと同様あるいは、それ以上のものでした。なぜなら、彼らは皆「外国人である自分が日本で認められるためには、日本人より努力しなくてはならない」という意識を持っているからです。そのためプロの方に担当していただいた講義に大変満足されていました。

講座を担当された日本語教育を専門としない方々にとっても、「自分たちの地域にこんな素晴らしい人材がいた」という出会いの場となりました。この人と仕事がしたい、地域貢献のパートナーになってほしい、という声があがりました。行政的な立場からも企業家としての立場からも、多様化している地域社会において多文化コンシェルジュの存在は頼もしく思われているはずです。

修了者の中には「自分の日本語学習体験やこれまでの人生経験を活かして今後の日本語支援のお手伝いをしたい」という方もいます。彼らの活躍に期待します。そのためのサポートをするのが、私たちの役割ではないのでしょうか。外国人が今の自分を幸せだと感じられる地域社会は、日本人にとっても「暮らしやすいまち・これからも暮らし続けたいまち」となると思います。ともに地域社会を担う人材教育を目標に掲げ、これからも日本語教育に携わっていけたら、と思います。

多文化コンシェルジュに必要な日本語でのプレゼンテーション能力育成について

西川寛之（明海大学）

多文化コンシェルジュに必要な日本語でのプレゼンテーション能力の育成に関する活動として、2回の講義を行った。また、プレゼンテーションのリハーサル動画を用いた個別対応、発表直前の個別相談を通し、指導を行ったポイントをまとめる。

1. プレゼンテーション技術に関する講義の第1回について

『多文化コンシェルジュのためのステップアップコース』（平成25年度文化庁委託事業）において、「プレゼンテーションの技法」と題し、発表の仕方についての講義を行った。そこで取り上げたものは、以下の4つの点である。

- （1）例や数字を用いるテクニック
- （2）視覚的効果に関する注意点（フォントの使い分けや、色盲等への配慮したバリアフリーの配色など）
- （3）広告等で用いられる二人称を用いた話し方の効果
- （4）プレゼンで用いられる「日本語」の表現の練習

当日は多文化コンシェルジュとして活動することを希望する浜松市在住の日本語非母語話者と日本語を母語とする大学生が同時に受講した。自身の発表の内容を伝える技術として、前述の（1）から（3）に関する解説を行った。

参加者のうち、具体的な発表内容の準備を終えている者と、発表等の準備の過程である者との間で異なる点があった。

具体的に発表の準備を終えている者にとっては、発表までに自身の準備内容の修正が可能であるかどうか判断しながら、講義の内容を受け止めることができていた。発表準備の過程である者にとっては、初めての事柄で戸惑いも見られた。具体的な例や数字への置き換えでは、自身の発表を聞く者に分かる例（面積を「東京ドーム4個分の広さ」などと表現するもの）について考える際にも、自身が何を説明するかをイメージすることが難しい様子であった。

日本語力が求められる（3）についても同様で、母語話者であるか否かによる違いを予想していたが、話す内容の準備ができている者のほうが、講義内の練習活動において、言葉の言い換えなどの対応もできていた。

プレゼンテーションの中での技法とは別に、「日本語」の表現の練習として、プレゼンテーションの前後の表現を取り上げた。司会者に紹介を受け、壇上に立

つときの簡単な挨拶や発表後の言葉を紹介し、グループ単位で練習するという活動を行った。母語話者が非母語話者をリードする形の活動を予定していたが、日本語の母語話者か非母語話者かを問わず、参加者すべてが一から考えて活動することとなった。この際にも、発表の準備を終えている者と、準備の過程である者との間で、対応に異なりがあった。

準備の過程である者は、初めての表現に戸惑いながらも活動を進めることができたが、自身の発表の準備を終えている者にとっては、自身の発表の内容をまとめたもの以外に、新たな課題として受け取られ、特に、数日後に多文化コンシェルジュとして活動を始めることになっていた参加者にとっては、心理的な負担に感じられたようである。この参加者からは（４）で紹介した表現ではなく、自身が現在準備している言葉で発表を行うことに対する評価を求める発言があった。

2. プレゼンテーション技術に関する講義の第2回について

「文化庁委託事業 多文化コンシェルジュのための日本語講座ステップアップコース」において、2014年12月6日に発表の仕方についての講義を行った。第1回との参加者に関する違いは、参加者全員発表の内容をほぼ確定していた点である。

この回での講義のポイントは以下の4点であった。

- (1) 発表の主張を前面に出す談話構成
- (2) パワーポイントのデザインにおける工夫
- (3) 言葉づかいのテクニック
- (4) 実践練習

第2回では、既に参加者が発表準備をしていたことから、講義内容を具体的に個別の例に落とし込むことができた。参加者の属性から大学生と社会人とに分けることができる。いずれの参加者も、自身の活動を時系列に説明する傾向があったが、社会人の中には、具体的な活動の紹介ではなく、外国人として生活する中から訴えるメッセージを中心とするものがあつた。

3. 生活者のためのプレゼンテーション能力育成について

第2回の講義後、受講者とプレゼンテーションの内容に関して意見交換を行った。その中で、大学生と社会人との違いが発表の機会による違いであるという意見があつた。大学生の発表の機会は、授業を除けば、自身の活動報告や紹介が多く、社会人として活動する者に発表が求められる機会は、職務上のものを除けば、自身の文化紹介もしくは日本での生活で感じていることであるというものである。

プレゼンテーションのテクニックの多くは共通していると考えられるが、少数派として日本社会の中で生活している者が、多数派に向けて発表をする際に求められるテーマについて配慮した支援（指導）が必要である。大学生が行う活動報告などの他に、例えば、日本社会に向けた少数派からのメッセージの伝え方や、支援の要請の仕方、「外国人の目から見た日本」など、日本で生活する外国人ならではのテーマに沿った発表の支援が必要となることが分かった。

「自立と自律」を支える人材育成 ～社会教育の視点から捉える多文化コンシェルジュ事業の課題～

藤田美佳（奈良教育大学）

本事業を終えるにあたり、代表の堀永乃は、2月10日に開催されたシンポジウムの報告として、多文化コンシェルジュ事業の受講者である寺田アリスが「フィリピン人に対する日本人の偏見・先入観をなくしたかった。」そのため「同胞外国人のサポートをしている」点と、その活動の支えになったのはGJである点を報告した際に、参加者（フロア）からの共感を得られていたことを事業協議会委員に対して述べている。その上で、1. 外国人支援に携わる者はどのような支援を行い、また2. どのような日本語教育を実施することが必要なのかの2点についての考察を小職に対して求めた。そこで本稿では1. 「自立と自律」を支える日本語教育の必要性、2. ユネスコ「成人の学習権宣言」に寄与し、ブラジルでの識字教育の成果で知られるパウロ・フレイレの課題提起型教育の観点から本事業の成果と課題を提示する。

寺田の指摘する課題を解決することに繋がるのは、日本人側の理解であることは言うまでもないが、そのためのセミナーやシンポジウムを継続的かつ定期的で開催して行くことが求められる。その点については、公民館（ただし浜松市の場合は地域活動センター）等の社会教育施設CLC(Community Learning Centre)において取り組まれて来たESD(Education for Sustainable Development)教育の理念を取り入れつつ、地域の組織と連携して継続して行くことが、持続的かつ多面的に多文化社会の構築に寄与することにつながるであろう。

そして1として挙げた「自立と自律」を支える日本語教育とは、「生活者としての外国人を支える日本語教育」を指向する際に、生活の基盤となる自立＝経済的な自立→就労支援につながる日本語習得、主体的に地域社会と関わり、自立した生活を営むことにつながる学習を保障していくことが求められる。GJでは、早くからそのためのキャリア形成や就職につながる介護ワーカー育成等のContent-Based（言語を機能的に学ぶというよりも、必要に即した学習内容を通じて、機能的な言語を学ぶ・獲得する）な日本語教育に取り組んで来た。これらの日本語教育を受けて来た地域の人財が多文化コンシェルジュとして、一歩踏み出した形で、学び、発信し始めたことは、多文化社会浜松のまちづくりに貢献する人財として成長した（キャリアを形成した）証左といえるだろう。それには、「自律的な学習」（学習のオートノミー）が基盤となっていると考えられる。例えば日本語能力試験や介護福祉士等の資格試験を受験するような学習には、「自律」の姿勢が求められる。自己の学習を意味付け、ふりかえり、精査して、学習

を継続する自律的な学習が、結果的に資格の獲得や就職につながり、経済的な「自立」につながるものである。

その際には、フレイレが指摘するような、指導者が一方的に知識を注入するような、垂直型の教育ではなく、学習者と指導者が水平的な関係の中で学習を行うことが求められる。これが2点目である。フレイレは、Listening 傾聴・聞き取り、Dialogue 対話、Action(for Change) (変革のための) 行動の3つのステップで水平的な教育を行うことを提起している。これは、単に目の前の課題を解決するための学習ではなく、課題として見えていることの背景にある社会的な矛盾や課題を、指導者・学習者が、対話的な学習を通じて、共に気づき、考え、話し合い、具体的な行動へと結びつけて行く課題提起型教育の仕組みである。

本事業では、学習者の要求を聞き取り（ヒアリング）、課題を共有しながら、具体的な学習内容を設定し、多文化コンシェルジュとして、講座を行うための事業計画と実施のプロセスで事業が展開されて来た。事業そのものがフレイレの指摘するような課題提起型の手法でもあり、個別の講義の際にも、ワークショップ形式を取り入れた対話的な講義を行い、異文化理解や国際理解の講座を受講者自身が行う際に体现できる仕組みが取られていたと言える。

とはいえ、2月6日の最終会議の資料「人財育成スキーム：ロードマップ」結論で述べられているように、多文化コンシェルジュ事業で設定した講座や活動が、日本人を対象としたものであったため、コンシェルジュが同国人をエンパワーすることに繋がる（同国人が連帯して、地域活動をするように繋がるような）学習へと展開する上では課題が残った。

「自立と自律」に繋がる学習を継続して来たコンシェルジュが、仲間たちの「自立と自律」を支えるキーパーソンとして、今後活躍して行くためのプログラム作りが求められる。そのためには、受講者の学習や活動の履歴をライフストーリー・ライフストーリー等の形で、様々なライフステージで直面した困難や克服のきっかけ、次のステージが広がったと認識できた背景などのエピソード集等を作成し、共に学び語り合うための教材として活用することもひとつの方法ではないかと思う。いずれにしても自律的な学習を行うには、自己の学習を評価する力を獲得する必要がある。今後はそうした学習の評価のための試みを育成プログラムの中に取り入れ、検証して行く必要があろう。

参考資料

以下、運営委員会と取組３における協議会資料を添付する。

○運営委員会

本事業が本来の目的に沿った運営をしているかどうかを諮る組織。本事業の成果と課題について協議を行ってきた。

○協議会

多様な機関が連携・協働して多文化コンシェルジュを育成していくスキームづくりのために創設された組織。それぞれの専門家によって、多文化コンシェルジュとなる人材の育成に関するプログラムの開発や課題について協議を重ねてきた。

平成 26 年 4 月 28 日
@ グローバル人財サポート浜松

第 1 回運営委員会資料

平成 26 年度文化庁委託事業

多様な人財を活用した地域社会の構築にむけた多文化コンシェルジュ育成事業

第 1 回運営委員会（次第）

1. 開会

2. 委員紹介

3. 運営委員会について

4. 協議

（１）昨年度の事業報告

※資料 1、協議委員による事業評価 参照

（２）今年度の事業概要

※資料 2 参照

（３）成果物と評価について

※資料 3 参照

5. その他

6. 閉会

1. 平成 25 年度の事業報告について

多文化コンシェルジュのための日本語講座を開催

ベーシックコース（取組 1） 2 時間×12 回×2 コース

ステップアップコース（取組 2） 3 時間×4 回



多文化コンシェルジュ育成協議会の実施（取組 3）



多文化パワーを活かしたまちなか活性化シンポジウムの開催（取組 4）



＜成果＞

- ◎多文化講座の講師や通訳・翻訳などの活動を通して自国の文化等を発信することのできる人材育成のプログラムの素案を築くことができた
- ◎多文化コンシェルジュ名鑑による情報発信
- ◎中部協働センターと市民協働センターとの連携により、多文化コンシェルジュが多文化講師として活動することができた
- ◎日本語教育に携わったことのない企業関係者や学生がシンポジウムに参加
- ◎事業運営に大学生が関わったことで次世代の視野を広げる機会となった

＜課題＞

- ◎伝え方・プレゼンテーション能力の習得に関する指導が不十分であった
- ◎文化講師として仕事を引き受けるも、講座の内容を組立てたりするところまでには至っていない

2. 平成 26 年度の事業概要について

● 目的

浜松市をはじめとする地域社会における、これからの多文化共生社会の構築には、高い日本語能力を有する外国人が率先して自らの文化や民族性を日本人に伝え、相互理解を深める場が必要である。そこで外国人の多文化パワーを地域に活かすべく、高い日本語コミュニケーション能力をもつ外国人多文化コンシェルジュを育成し、地域の多文化共生社会づくりに寄与する人財としていく。

● 内容の概要

多文化コンシェルジュに期待される役割は、①同国出身者に対して日本で生活するうえで必要な知識や能力の習得を支援する、②同国出身の観光客に対して日本や自分の居住地の素晴らしい魅力を伝えることができる、③日本人（企業や行政等の機関を含む）に対して母国の文化や習慣、価値観などを伝えることができる、④日本と母国との懸け橋となる一などといったものがあげられる。平成 25 年度事業において多文化コンシェルジュの育成を実施したところ、実際に地域の公民館や中学校のキャリアデザイン講座等で講師を務めたり、同国出身者向けの情報誌を作成しようとしているなどの社会参画の糸口をつけられた者もいるが、自発的な社会参画に必要な日本語指導の完成度や事業運営基盤の体制整備はいまだ不十分さが否めないでいる。そこで、26 年度では、①コンシェルジュとしての役割を十分に担えるような企画立案やプレゼンテーションに必要な日本語を習得するための講座を 2 ステップ構成で開講（取組 1. 2）、②受講者が①で学んだことを活かし講座を企画し運営する機会の提供（取組 3）、③コンシェルジュが活躍できるよう多様な機関による体制整備と事業ノウハウのまとめ（取組 3）、④他地域に汎用できるよう成果の情報発信（取組 4）、の 4 点を行う。

● 成果

受講者アンケート、受講者が企画実践した多文化講座の参加者アンケートの満足度と自身の振り返り評価、講師に対するヒアリングによる評価により成果を検証する

→事業成果については、協議が必要

- 連携体制

運営委員会とその下部組織として NPO の中間支援組織である市民協働センターと地域公民館（中部協働センター）、さらに社会教育の専門家と共に多文化パワーを街中に生かす協議会を設置する。これにより、日本人の異文化理解と多文化共生に対する理解を深める機会の提供と外国人の人材育成について推進する方策を具体的に実行していく。また、外国人の日本社会への参画に向けた道筋づくりに、文化・民俗学的知見から客観的な評価・見識を得ることにより、そこに必要な高度な日本語能力について言及する。こうした機関・専門家の連携により、外国人による多文化パワーが地域にもたらす具体的な効果を明言していく。

3. 成果物と評価について

- (1) 多文化コンシェルジュ名鑑の活用
課題；周知不足、周知先の開拓

- (2) 人材育成システムのまとめ

平成 26 年 12 月 10 日
@ グローバル人財サポート浜松

第 2 回運営委員会資料

平成 26 年度文化庁委託事業

多様な人財を活用した地域社会の構築にむけた多文化コンシェルジュ育成事業

第 2 回運営委員会（次第）

7. 開会

8. 事業報告

多文化コンシェルジュのための日本語講座

・ベーシックコース

・ステップアップコース（現在実施中）

9. 協議

（４）シンポジウムについて

※資料 1 参照

（５）成果物と評価について

※資料 2 参照

（６）来年度事業について

10. その他

11. 閉会

シンポジウム企画書

目 的 少子高齢化が進む地域において、持続可能な社会づくりには、市民協働が欠かせません。グローバルな時代を迎えた今こそ、文化や人の多様性を活かして、地域の課題を解決していくことが望ましい。そこで、多文化共生を目指す浜松として、外国人市民「も」協働のパートナーとして迎え入れ、共に地域づくりをしていくことを提言していく。

日 時 平成 27 年 2 月 10 日(火) 13:00～16:30(会場 12:30)

場 所 ザザシティ浜松中央館5F ギャラリー1

定 員 50 名

内 容 「人や文化の多様性を活かした持続可能な社会づくり」

13:00 開会

13:15 講演「外国人『も』協働のパートナー」

川北秀人氏(IIIHOE 代表)

14:15 プレゼンテーション「浜松における私の思いを聞いてください」

発表者 エディスさん(インドネシア)、金城アイコさん(ブラジル)、宮本ルーカス(ブラジル)、田近ヨアンナさん(ポーランド)、寺田マリアさん(フィリピン) 予定

15:15 休憩

15:20 パネルディスカッション「多様な人財を活かした持続可能な社会づくりとは」

コーディネーター 西原鈴子氏(国際交流基金)

パネリスト 川北秀人氏(IIIHOE 代表)

匂坂幸治氏(エネジン株式会社)

石塚良明氏(浜松市国際課長)

16:30 閉会

2. 成果物と評価について

● 事業概要

平成26年度では、①コンシェルジュとしての役割を十分に担えるような企画立案やプレゼンテーションに必要な日本語を習得するための講座を 2 ステップ構成で開講(取組1. 2)、②受講者が①で学んだことを活かし講座を企画し運営する機会の提供(取組3)、③コンシェルジュが活躍できるよう多様な機関による体制整備と事業ノウハウのまとめ(取組3)、④他地域に汎用できるよう成果の情報発信(取組4)、の4点を行う。

● 成果物

<講師>

・中部協働センター「世界の国から日本を見てみよう」の開催



・三井物産(株)「カエルプロジェクト」でのエプロンシアター



・東部中学校「中学 1 年生総合学習～多文化共生」



<講座の企画>

- ・中部協働センター、浜松市文化振興財団「ショパンなひととき」企画
平成 27 年 2 月 8 日(日)
- ・曳馬協働センター、ボーイスカウト「ゲルでモンゴル文化体験」企画
平成 27 年 2 月 14 日(土)、15 日(日)

<調査結果>

- ・シンポジウム参加者へのアンケート結果
- ・受講者に対するインタビュー調査の結果

<制作物>

- ・外国人による日本語学習プログラムの素案の作成
- ・外国人住民のライフロードマップの作成

平成 27 年 3 月 9 日
@ グローバル人財サポート浜松

第 3 回運営委員会資料

平成 26 年度文化庁委託事業

多様な人財を活用した地域社会の構築にむけた多文化コンシェルジュ育成事業

第 3 回運営委員会（次第）

1. 開会（10：30）
2. 事業報告
 - 1）多文化コンシェルジュのための日本語講座 ※資料 1 参照
 - ・ ベーシックコース

 - ・ ステップアップコース
 - 2）多文化コンシェルジュ企画による文化講座 ※資料 2 参照
 - ・ ショパンなひととき

 - ・ 自然のなかで世界を感じてみよう～モンゴル・ゲル～
 - 3）シンポジウム ※資料 3 参照
3. その他
4. 閉会

多文化コンシェルジュのための日本語講座

①ベーシックコース

<内容>

第 1 回	7 月 4 日	7 月 5 日	自国の文化紹介をしてみよう①
第 2 回	7 月 11 日	7 月 12 日	日本の文化紹介をしてみよう②
第 3 回	7 月 18 日	7 月 19 日	広報・お知らせの書き方、見せ方
第 4 回	7 月 25 日	7 月 26 日	読み聞かせをしてみよう
第 5 回	8 月 1 日	8 月 2 日	おもてなしマナー
第 6 回	8 月 8 日	8 月 9 日	お手紙を書こう
第 7 回	9 月 5 日	9 月 6 日	日本人とうまく働く秘訣
第 8 回	9 月 12 日	9 月 13 日	自己 PR、魅せるポイント
第 9 回	9 月 19 日	9 月 20 日	行政文書の書き方
第 10 回	9 月 26 日	9 月 27 日	異文化講座を企画しよう
第 11 回	10 月 3 日	10 月 4 日	実際にやってみよう①
第 12 回	10 月 10 日	10 月 11 日	実際にやってみよう②

<参加者国籍>

24 名（フィリピン、ブラジル、ペルー、中国、モンゴル、ポーランド、ベトナム、インドネシア、日本）



②スキルアップ講座

<内容>

第1回	10月25日	藤田美佳	教案づくり
第2回	11月1日	清ルミ	実践から学ぶ講座運営の秘訣
第3回	1月17日	西川寛之	プレゼンテーション1
第4回	1月24日	堀 永乃	プレゼンテーション2

<参加者数>

15名（フィリピン、ブラジル、ペルー、中国、ポーランド、インドネシア、日本）



●ショパンなひととき

日 時 平成 27 年 2 月 8 日（日） 14：30～16：30

参加者数 120 人

内 容

講演「ワルシャワと浜松のつながり」

トークセッション

丸山好洋氏（静岡県名工・楽器職人・調律師）

田近ヨアンナ（ポーランド出身・元ピアニスト）

ピアノ演奏

成 果 浜松とワルシャワの国際ピアノコンクールの違いがわかるなど、ピアノだけではなく、音楽イベントとしても評価が高かった。楽器職人とのコラボができ、多文化共生とは異なる参加者が多く、外国人の活躍の必要性について伝えることもできた。

協 力 ドレミ楽器株式会社

共 催 中部協働センター、浜松市文化振興財団

後 援 浜松ワルシャワ友好協会



●モンゴルゲルを建てよう

日 時 平成 27 年 2 月 14 日（土） 13：00～16：00

参加者数 30 人

内 容 モンゴルの遊牧民族の家である「ゲル」を建てる

成 果 フィリピンナガイサの参加もあり、モンゴル人とフィリピン人、そして日本人の 3 か国間での交流ができた。多文化共生への関心とは異なり、単純にゲルを見に来たという一般市民の方の参加があり、そういう人たちに対して静岡県内にモンゴル人がいることを伝える好機となった。

協 力 曳馬協働センター、ボーイスカウト 24 分団



●自然のなかで世界を感じよう～モンゴル・ゲル～

日 時 平成 27 年 2 月 15 日（土）10：30～16：30

参加者数 150 人（モンゴル人 10 人、日本人 140 人）

内 容 モンゴルの遊牧民族の住居「ゲル」を建て、モンゴル料理「ボウズ」を作って生活文化を体験した。また、馬頭琴の演奏を聴き、動物の骨の楽器などを見て触って音楽文化を学んだ。さらに、モンゴル人留学生や在住モンゴル人とのおしゃべりで、子どもたちがモンゴル語やゲーム、トイレなどの生活習慣について質問するなどして様々なモンゴル文化を知る機会とした。

成 果 長時間にわたる事業だったにも関わらず、非常に多くの参加者があった。

アンケートの結果は以下のとおり（原文のまま）

- ・大人でも楽しめるくらい、色々な事が勉強になりました。
- ・なかなかできない体験が出来ました。
- ・モンゴルの文化に触れて楽しかったです。

- モンゴル出身の方がこんなに県内にいるとはしなかった。
- 色々勉強にもなったし、とても楽しかったです。また、機会があれば参加したい。
- 思いがけず、モンゴルのいろいろな文化に触れることができ、とても楽しかった。
- 実際に馬頭琴に触れたり、それ以外の楽器の音色を聞かせて頂き、良い体験をさせて頂きました。ゲルの組み立てもさせて頂き、中にも入り、たくさんのお話を聞けて文化の違いを感じて良い勉強となった。

以上のとおり、参加者が異文化を体験しただけではなく、生涯学習の一つとして異文化を学ぶことができ、モンゴル人留学生や在住者がいることを知る機会となった。これは静岡県がモンゴルとの交流を進めていくうえでも果たした役割は大きいと思われる。

協 力 曳馬協働センター、ボーイスカウト 24 分団、静岡県

アンケートのお願い（集計）

アンケート回収 21 / 57（回収率 約 36 %）

1. 内容はいかがでしたか

☐大変よかった 14☐よかった 6☐ふつう☐あまりよくなかった☐よくなかった

2. （1の回答について）その理由をご記入ください

- ・外国人、企業、自治体の意見が聞けた。浜松市の共生のきっかけになればいいと思う。
- ・持続可能なまちづくりのために、これまでと同じ政策を続けていけば自治体はハタンしてしまうということが改めて認識できたため
- ・日本の現状と今後の外国人との連携・協働について、強く感じることができた。川北氏のお話をもう少し聞きたかった。
- ・話が面白かった。
- ・やや企業中心の印象を受けた。
- ・基調講演 普段ほとんど聞かない内容の話でとても面白かった。企業研修ってこんな感じで行われているのかと思いました。でも終わってみたら、あれ？外国人も協働のパートナーであることを共に考えて・・・みたでしょうか？トークセッションのスタイルがとても良かったです。
- ・川北先生のお話。早口すぎてよくわからなかった（聞き取れなかった）。
- ・普段聞くことのできないお話が聞けた。外国人との接し方がわかった。
- ・基調講演は市の将来について考えさせられました。
- ・浜松在住の外国人の方の印象・意見は今まで聞いてきた声とは異なり、もっと近くリアルに感じたから。
- ・浜松在住の外国の方々の活躍を知ることができた。
- ・大変勉強になりました。ありがとうございます。
- ・浜松で頑張っている外国の方々の声を聞くことができたからです。
- ・自分たちが向き合うべき現実・予測がよく分かった。
- ・日本人でも外国人でも住みよい社会地域を創ることは共通の思いであること。
- ・先入観で人や物を見ないことを考えさせられました（寺田さんのコメントより）。
- ・短い時間内でももう少し深いところまで話を聞きたかった。

- ・様々な立場の方々の生の声を聞くことができ大変良かったです。
- ・外国人の声（考え、思い）が聞けた。皆さん頑張っていて、素敵です。
- ・豪華なゲストに盛りだくさんの内容で良かったです。大変勉強になり、名古屋から来た甲斐がありました。

3. 一番、印象深かった内容はどれですか

☐ 基調講演 7

☐ トークセッション 12

☐ パネルディスカッション 6

→なぜ、ですか？

- ・他業種いろいろな立場の方のお話を伺え勉強になった。みなさんからもっとゆっくりお話を聞いてみたい。
- ・超高齢化という問題について、現実的に考えることができた。
- ・遅れてきたから
- ・司会、進行、登壇者が全員外国人であったこと。外国人の本音、来日前～来日～現在の話が興味深かったです。
- ・具体的な数字をもつての話は説得力があり、今後の危機感から今を考えるきっかけづくりとなった。
- ・トークセッションのみ参加させていただいたため。
- ・苦労しながら自分の場所を見つけた様子がよくわかりました。
- ・ジュン君の話をはじめ、浜松に住む外国人の皆さんの考えや浜松への想いが素晴らしかった。
- ・外国の方の考え方や思いを知ることができました。
- ・部分的ではあったが、現場を見ている 3 人のパネリストが現場の声を聞かせてくれた。
- ・どれもです！特に企業の人のお話を聞く機会があまりなかったため、今回は大変よかったと思います。
- ・石塚さんの資料がほしかった。
- ・みなさんの素直な生の声を直接聞けて心に響きました。

4. 今回のシンポジウムはどうやって知りましたか

☐ 知人・友人から 10

☐ チラシで 4

☐ ホームページ／Facebook で 3

☐ HICE／SIR で

☐ その他（ハマゾーブログ 1、堀さんから 1、ダイレクトメール 1、家族から 1、その他 1）

5. 人や文化の多様性を活かすために、何が必要だと思いますか。(自由記述)

- ・外国人と市民が交流を深めることが必要
- ・相手を理解しようとする気持ち
- ・お互いを知ること、関係者だけではなく一般の方を巻き込んでの知る機会が必要
- ・当事者（在住外国人）のコミュニティを強める。また育成に力を入れる。
- ・日本人の異文化・多文化共生意識の改革。同じ日本人同士の異文化に対応・受容できるアタマの柔らかさ。外国人の登壇者には女性が多い。でも日本人の登壇者は西原先生以外全員男性?! 企業から女性は出られないのか? 出てほしい。欲を言えば外国人にも。
- ・日本人も外国人も自分の関心のあることを得意とする分野を仕事にすることがその人を活き活きさせ、まちで頑張ることにつながると思う。地域の人が外国人と対話を通して連携し外国人に活躍してもらう場を地域につくる。
- ・内面教育、人への思いやり精神を持つ。
- ・互いの文化を認め合う態度が必要だと考えます。生活慣習も知ることが大切だと考えます。交流の場、文化事業の広報にも注意して行きたいものです。
- ・交流。
- ・コミュニティを多く広く。マッチングの場を多くする。
- ・相互理解だと思います。
- ・お互いの文化を知ること、受け入れられる土壌を作ること。
- ・トークセッションで紹介されていた、言葉よりも“笑顔”。相手を知る、理解すること。
- ・外国人市民から見た浜松再発見。
- ・人材育成と地域の人たちの意識変革。
- ・まずお互いの考えを知り合うこと、一緒に考えてアイディアを出しあう→実行。
- ・活躍できる機会を増やす、作ること。接点。

6. あなたのお住まいは、どちらですか

☐ 浜松市内 12

☐ 浜松市内 9

協議会資料

第1回 資料①

外国人の多文化パワーによる地域力向上推進プロジェクト

目的

多文化コンシェルジュがもつ多文化パワーを活かすことにより、地域にどのような社会的効果が得られるかを明確にする。

内容

- ① 外国人多文化コンシェルジュ育成協議会を設置し、その人材育成のスキームについて多様な視点から協議していく。今年度は、高い日本語能力を有し地域社会で様々な活動をしている在住外国人に対しポートフォリオ活動を共に行い、彼らの学習過程や経験から共通する項目から社会参画に至るまでに必要な環境や学習段階を分析する。
- ② 取組2（スキルアップ講座）の受講者がコンシェルジュとして日本人との相互理解を深めるための講座の開催等を通じて、その機会の提供を行い（中部協働センターでの異文化理解講座、浜松市立中央図書館での読み聞かせ講座、浜松市科学館での母国の空を体感する講座など）、外国人の社会参画とつなげていく協働の体制を構築する。
- ③ 多文化コンシェルジュの情報整備を行い、広く地域で活躍できるような出口支援の体制を整備する。
- ④ これら一連の育成過程をまとめることで、カリキュラム案に追記できるようなカリキュラム提示のための冊子（キャリアパスがわかるもの）を製作する。

目標

- ① 人材育成スキームの確立
- ② 多文化コンシェルジュ名鑑の充実と普及

スケジュール

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
コンシェルジュ		C →		→	→	→	→	→	シンポ
異文化講座		全4回				全4回			
ヒアリング調査		→	→	→	→	→	→		
育成案作成						→	→	→	→
協議会	●			●		●			●

1. ポートフォリオとヒアリング調査

日本語能力が高い外国人が、どのような学習プロセスや生活背景を把握し、在住外国人の高度人材化の素材としたい。

例)日本語で〇〇ができるようになったら、〇〇をするようになった(仕事や社会活動など)

どの程度の日本語能力に手応えを感じたら、社会参画しようという気持ちを生じるようになったのか

など

2. 異文化講座の授業評価

中部協働センター等で多文化コンシェルジュが講師として登壇しているところを実際にご覧いただき、評価をしていただきたい。

3. キャリアパスの確立

現状と課題

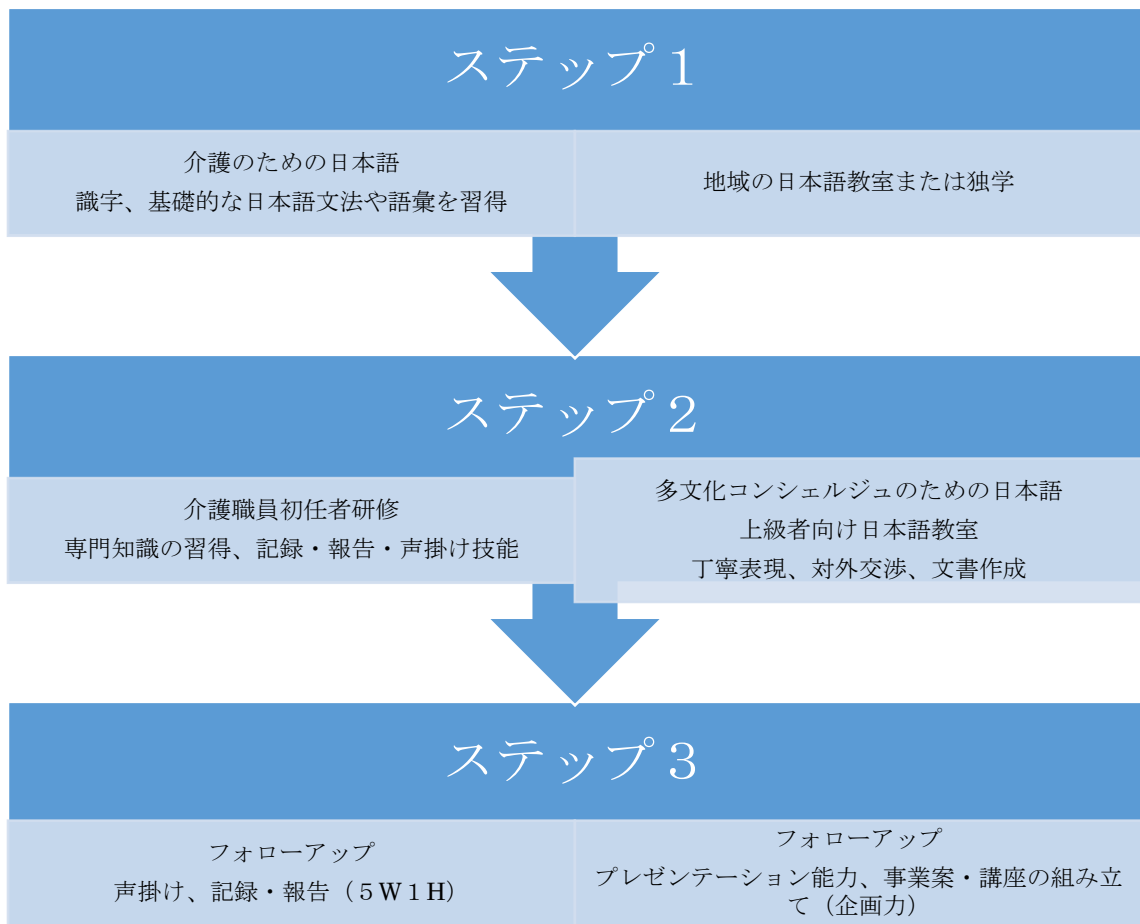
すでに浜松市内にはたくさんの日本語教室がある。

地域で学ぶ日本語教室のほとんどが初級者向けで、上級者レベルの受講者は非常に少ないのが現状。しかしながら、上級者なりに学びたいことがある。

しかも、指導者は中上級者を相手に何をどのように教えたらいいのかわからず、困難な状況にあるため、能力試験の対策ばかりに気がとられてしまっている。

高い日本語能力を有する外国人が、日本語で何ができれば積極的な社会参画ができるようになるのかを示すためには、在住外国人向けのキャリアパスを示すことが必要である。そこで、どんな能力を得たら、どういうことができるようになるのかを提示して、在住外国人のキャリア形成における指針(モデル)を示していきたい。

これにより、指導者側も何をどの順で教えていけば、彼らのニーズにあった指導法ができるのかを考えることができるのではないだろうか。



例) ある南米系外国人の場合

独学で日本語を学んだ(口頭能力に問題はない)

↓ 既に派遣会社のリーダーとして中間管理職的立場にいる

識字・文法を学びなおしたい

↓

プライベートレッスンに通う(適切な教室がない)

会話文を例にして、文法の学び直しをしている

受講者ポートフォリオ 有効回答数 5人

1. 講座に参加する前、どうでしたか ※☑をつけてください ア) 日本語レベル ☐ まだまだ不十分だと思った 2 ☐ 十分できると思っていた 3 イ) 多文化コンシェルジュはなぜ受講しようと思いましたか ☐ 活動に興味があったから 1 ☐ 知人や友人の紹介で ☐ 自分の将来を考えて何かできるようになりたいと思ったから 3 ☐ その他()
2. 講座修了後のご自身にどのような変化(成長)がありましたか いろいろなことを勉強できました(原文のまま) 多様化する社会をつなぐ、人と人を結びつけることができました。よかったです。 いろな国の食文化を知ることができました(原文のまま) 自分のことやお話したい内容のまとめかたがわかって、前よりできるようになりました(原文のまま) 人の前に自分が思うことを伝えるようになりました(原文のまま) 視野がひろがりました(原文のまま)
3. 多文化コンシェルジュのための日本語講座に参加して ア) 満足度 0% ————— 50% ————— 100% 100%(2)、85%(2)、50%(1) イ) 達成度 0% ————— 50% ————— 100% 100%(1)、90%(1)、85%(2)、50%(1) ウ) 不足していると思う能力 複数回答 ☐ プレゼンテーション力 4 ☐ 文書作成力 2 ☐ 講座の構成力 1 ☐ 日本語力(具体的に)
4. コンシェルジュの活動とこれからについて

ア) コンシェルジュの活動に対して、どのように思いますか

☐ 個人で通訳・翻訳の仕事をしてみたい 2

☐ 文化講座の講師をしてみたい 1

☐ ツアーコンダクターやガイドの仕事をしてみたい 1

☐ 母国との懸け橋として、海外事業部などの事務で働きたい 4

☐ 自分で会社を経営したい 1

☐ 外国人コミュニティのリーダーになり、後輩の外国人をまとめていきたい

☐ 学校や市役所などの通訳スタッフになりたい 1

☐ その他

イ) 文化講座の講師を体験してみて

① ☐ 簡単だった ☐ 難しかった 2 ☐ どちらとも言えない

② ☐ またやってみたい 5 ☐ もうやりたくない ☐ わからない

ウ) 外国人のための日本語教室を開催するときに、みなさんは日本語の指導者になってみたいと思いますか

☐ はい 4

☐ いいえ 1

エ) 外国人のために母国語で日本語を学べる教室が必要だと思いますか

☐ はい 4

☐ いいえ 1

オ) 外国人のための日本語コースのコースデザインをしたら、あなたもプロジェクトメン

バーとしてコースと一緒に考えることはできますか

☐ はい 5

☐ いいえ

カ) これから、学んでみたいこと、やってみたいことがあったら書いてください

もっと日本語と日本文化を知りたい

● 人材育成スキーム;ロードマップ

【多文化コンシェルジュの背景の把握】

多文化コンシェルジュのヒアリング調査を通して、彼らの日本語学習の動機と変遷

→共通点を見出す。多文化コンシェルジュに至るまでに必要な能力の明示

※能力は日本語で何ができるか

【多文化コンシェルジュの人材育成プログラムの提示】

2年間の講座のなかで、適切で必要性の高い内容と習得すべき能力を明らかにする

→受講者アンケートで多文化コンシェルジュになったものの、まだ自分にどんな能力が足りていないかを明らかにした

<結論>

- 多文化コンシェルジュ育成講座の受講前までに必要とされる日本語能力は、情報収集能力と意向・意思を的確に口頭で表現できる能力である。
- これらの能力を有する外国人を対象に多文化コンシェルジュの育成を行う際には、日本語で「文章作成能力」「視覚教材作成能力」「プレゼンテーション能力」「調査実行能力」「ニーズ把握能力」を養うプログラムが最適である。
- ある程度の能力が習得できると、異文化理解講座等での講師を務めることが可能となる。しかし、その能力が不十分である場合は、講座の主催者側である日本人が相当の作業補助に入らないと実施することは難しい。

しかし、現在、多文化コンシェルジュは日本人をターゲットにした活動にしかすぎない。来年度は同国出身者をターゲットにした活動を行えるようにしていきたい。

<理由>

- 「日本語能力が超初期レベルの外国人」に対してバイリンガルで学ぶことのできる日本語講座があると、来日すぐの外国人にとって日本社会に適応しやすくなるのではないか
- コンシェルジュの日本語学習経験から苦労したエピソードを振り返ると、こんなことを早く習っておけばよかったと思うことが多々ある

平成 26 年度文化庁「生活者としての外国人」のための日本語教育委託事業

多文化コンシェルジュのための日本語講座

Japanese for Multicultural Concierge

自分の母国語や文化を教えたり、伝えたりする人のことを 多文化コンシェルジュ と いいます。
講座を開いたりイベントをしたり あなたの国や地域の文化を紹介する 多文化コンシェルジュとして、
あなたも地域で活躍してみませんか。 多文化コンシェルジュに 必要な日本語を勉強します。



【 Basic Course 】

☆Morning Class 毎週金曜日 10:00 ～ 12:00

1st Stage 7月4日～8月8日 / 2nd Stage 9月5日～10月10日

☆Afternoon Class 毎週土曜日 13:30 ～ 15:30

1st Stage 7月5日～8月9日 / 2nd Stage 9月6日～10月11日

【 Skill Up Course 】

10月25日、11月1日、12月6日、1月24日 土曜日 13:30 ～ 16:30

→くわしくは、裏面へ

定 員 各クラス 10名 ※先着順
対 象 多文化コンシェルジュになりたい方、
興味のある方、日本語能力 N2 程度以上
受講料 無料
場 所 グローバル人財サポート浜松 他
申込み Mail (info@globaljinzai.or.jp) にて
お申込みください
主 催 グローバル人財サポート浜松



一般社団法人グローバル人財サポート浜松 浜松市中区鍛冶町 1-64 育栄ビル3F
Tel 053-482-8451 / Fax 053-482-8452 / HP <http://www.globaljinzai.or.jp>

この講座は、多文化コンシェルジュとして学校や公民館（現、協働センター）等で母国の言葉や文化などを日本人に伝える講師や同国出身者に対して日本の生活文化や日本語などを教えることができる人を目指すための講座です。

【 Basic Course 】

1st Stage

	テーマ
第1回	じこく ぶんか しやうかい 自国の文化を紹介してみよう
第2回	にほん ぶんか しやうかい 日本の文化を紹介してみよう
第3回	こうほう み かつ み かつ 広報 見せ方・魅せ方
第4回	としよかん よ き まな 図書館で読み聞かせを学ぼう
第5回	”おもてなし”のマナー
第6回	てがみ か 手紙を書こう

2nd Stage

	テーマ
第1回	にほんじん したちひけつ にほんじん かつ かん 日本人と働く秘訣～日本人の価値観
第2回	じこ じぶん ひ ど 自己PR～自分のいいところ引き出そう
第3回	ぎょうせいぶんしよ いらいじよう しんせいしよ か かつ 行政文書（依頼状・申請書）の書き方
第4回	こうぎ きかく 講座を企画してみよう①
第5回	こうぎ きかく 講座を企画してみよう②
第6回	じっさい 実際にやってみよう

☆☆豪華な講師陣（一部ご紹介）☆☆



長田治義氏

浜松市市民協働センター長
広報の仕方、技術を教えます！



山本泰子氏

タレント養成学校ヒーローズアカデミー校長
自分の魅せ方を教えます！



浜松市図書館
読み聞かせ指導



山下純乃氏

株式会社呉竹社 若女将
”おもてなし”のマナーを教えます

【 Skill Up Course 】

	テーマ
10月25日	じはぎょうあん つく 授業案を作ってみよう
11月1日	こうぎ じっさい えんしゆ 講座を実際にやってみよう（演習）
12月6日	プレゼンテーション力を高めよう
1月24日	はつぴよう ポスター発表



清 ルミ氏

常葉大学外国語学部教授
講座の実践（演習）を教えます！
清先生から授業指導は、とても貴重です！

このほか、素晴らしい講師たちが 教えます

【お申込み】 メール (info@globaljinzai.or.jp) へお申込みください

【お問い合わせ】 グローバル人財サポート浜松 053-482-8451

人や文化の多様性を活かした持続可能な社会づくり

人口減少と少子高齢化が急速に進む地域において、持続可能な社会づくりのためには市民協働が欠かせません。グローバルな時代を迎えた今、日本のみならず世界各国が、外国人に対して労働力や生産力を期待しています。これからの20年・30年後の私たちの未来を考えるならば、文化や人の多様性を活かし、地域が抱える様々な課題を解決していくことが必要となるでしょう。そこで本シンポジウムでは、多文化共生都市を目指す浜松で、『外国人市民「も」協働のパートナー』の社会づくりについて考えていきます。

20年、30年後も浜松「が」選ばれる街になるために



**2月10日（火）
13:00～16:30**

場 所 ザザシティ浜松中央館 5F ギャラリー1
定 員 50名
対 象 外国人との協働に関心のある方など
参加費 無料
申込み お名前・ご所属、ご連絡先を明記のうえ、
Mail(info@globaljinzai.or.jp) ください

基調講演「人や文化の多様性を活かした社会を目指して」

講師 川北秀人 (IIHOE 代表)

トークセッション「浜松に暮らす私たち『も』協働のパートナー」

在住外国人による発表とトークセッション

進行 宮本ルーカス (ブラジル出身)

パネルディスカッション

「多様な人財を活かした持続可能な社会づくりとは

～これからの10年を目指して～」

コーディネーター 西原鈴子氏 (国際交流基金日本語国際センター所長)

パネリスト 川北秀人 (IIHOE 代表)

匂坂幸治 (エネジン株式会社営業企画部長)

佐野 憲 (株式会社シーポイントはまぞう事業部本部長)

石塚良明 (浜松市企画調整部国際課長)

平成26年度文化庁「生活者としての外国人」のための日本語教育委託事業

主 催 一般社団法人グローバル人財サポート浜松

浜松市中区鍛冶町1-64 育栄ビル3F TEL 053-482-8451 FAX 053-482-8452

人や文化の多様性を活かした持続可能な社会づくり

【基調講演 13:10～14:10】

少子高齢化が進むなかで持続可能な地域づくりには市民協働が必要です。グローバルな時代の今こそ、20年・30年後の未来を見据えて、外国人「も」協働のパートナーであることを共に考えてみましょう。

講師 **川北秀人** 人と組織と地球のための国際研究所（IIHOE）代表



＜略歴＞1964年生まれ。京都大学卒業後、株式会社リクルートに入社。国際採用・広報・営業支援などを担当し、91年に退職。その後、NGOの代表や国会議員の政策担当秘書などを務め、94年にIIHOE設立。NPOや社会責任・貢献志向の企業のマネジメント、CSRや環境・社会コミュニケーションの推進を支援している。2001年以来、環境社会報告書・CSRレポートの第三者意見執筆は計27社116回。市民との対話のファシリテートは計28社91回を担当。2013年度の第三者意見執筆は10社（アルパイン、積水ハウス、デンソー、協和発酵キリン、SGホールディングス、カシオ計算機、損保ジャパン、日立ソリューションズ、ブラザー工業、横浜ゴム）。現在、内閣府「地域における女性活躍推進に関する調査研究検討会」の委員なども務めている。

【トークセッション 14:15～15:20】

外国人市民のなかには、文化通訳者として異文化理解講座や文化紹介講座で講師を務めたり、市役所や学校、国際イベントの通訳として活躍している人たちがいます。今回は、そんな彼らから見た浜松の魅力や新たな文化創造のために自分ができること、今の活動を始めるきっかけになったエピソードなどのお話を伺います。

進行 **宮本ルーカス**（ブラジル出身）

登壇者 **田近ヨアンナ**（ポーランド出身）、**金城アイコ**（ブラジル出身）、**花嶋珠恵**（中国出身）

エディス ジュン（インドネシア出身）、**寺田アリス**（フィリピン出身）

【パネルディスカッション 15:20～16:30】

多文化共生都市を目指す浜松において、多彩な能力を有する外国人との協働は行政や市民だけでなく企業も積極的かつ着実に始めています。国際社会において浜松がより魅力的な都市になるための対話を深めます。

コーディネーター **西原鈴子** 国際交流基金日本語国際センター所長

パネリスト **川北秀人** IIHOE 代表

匂坂幸治 エネジン株式会社営業企画部課長

佐野 憲 株式会社シーポイントはまぞう事業部本部長

石塚良明 浜松市企画調整部国際課長

申込み お名前・ご所属、ご連絡先を記入して、E-mail にてお申込みください。

E-mail info@globaljinzai.or.jp

問合せ 一般社団法人グローバル人財サポート浜松

TEL 053-482-8451 FAX 053-482-8452

URL <http://www.globaljinzai.or.jp>